

映画「2887」堂々完成、劇場公開！

映画製作の意図

2019年11月20日、安倍首相は在任期間が2,887日となり、歴代の首相として最長を記録しました。これで安倍首相は、歴史に名を残すことでしょうか、歴史の教科書にも取り上げられることでしょうか。それでは、この間に何をやり何をやらなかったのか？5つのテーマ（憲法改正、福島原発、アベノミクス、拉致問題、辺野古新基地建設）を設定し、その足跡を検証して記録する、というのがこの映画です。タイトルの『2887』は、アベ政権の2,887日です。

映画を製作した私たち4人は、大学時代からの友人で、普通の年金生活者です。いつかは映画を作りたい、との思いを抱き続け、今ここに映画『2887』として、その思いを実現しました。私たちには映画製作の経験はありません。しかし、澤地久枝さん、斎藤貴男さんと話を重ねて脚本を書き、技術面では専門家の力を借りてここまで来ました。私たちが見たい映像を集め、聞きたい人の声を紡いできましたので、目指した作品になったのでは、と評価しています。

安倍首相は息を吐くように嘘をつく、と言われます。そして、この嘘に合わせて社会は回ります。政治家も官僚もメディアさえも安倍首相の嘘の同調圧力に飲み込まれていくのです。だからこんな危うい社会があったこと、それでも異を唱えた人たちがいたことをしっかりと記憶したいと考えました。

映画『2887』監督 河野 優司

必見のドキュメンタリー

この作品は、日本の民主主義が破壊されていく過程を描いた同時代史だ。荒野と化した社会を、少しでも真つ当な形に築き直すには、果てしのない時間を要するに違いない。これは、見て楽しめるエンタテインメント作品ではない。だが、この国の現実を直視し、ではどうすればよいのかと自問自答する契機とするには、必見のドキュメンタリーだ。やむにやまれぬ思いで、退職金を投げ打って製作に没頭した監督と、学生時代の映画研究会以来という、素敵な仲間たちに、心から拍手を送りたい。

ジャーナリスト 斎藤 貴男

もう笑うしかない！

モリだのカケだの、友人のソバに寄り添って、国民のソバにはいなかったアベ首相。そんな人が歴代の首相の中で在任期間が最も長かったなんて恥ずかしい。コロナ対策も「空前絶後の規模で世界最大の対策」をやってくれました。それが「マスク二枚！」。しかも、小さいのです。口を覆うと鼻が出ます。鼻を覆うと口が出るのです。そうか、だから、二枚だったんですね。二枚が好きなんです、アベさんは。だって、舌が二枚舌です。これでは国民の期待に応えられるわけがない。もう笑うしかないです。さあ、映画を観て、怒って、そして笑いましょう。

お笑い芸人 松元 ヒロ

アベ政権の無策を肌で感じて！

安倍晋三政権は、憲政史上最長の在任（罪人）期間を記録したという。では、いったいそのあいだ何を成し遂げたのだろうか。「空白の20年」と巷間叫ばれているが、この国の社会生活を戦後最悪にぶち壊した安倍政権の責任はただでは済まされない絶大なものである。そうした観点から、この映画は欠くことのできない作品であると確信している。ひとりでも多くの人たちに観ていただき、安倍政権がいかに無為無策であったか、を強く肌で感じてもらいたい。

元拉致被害者家族会 蓮池 透

それでも人々は異論を唱えることを止めない

アホノミクスの大將すなわち安倍晋三の野望が渦巻いた日本社会は、間違いなく、誠に危うい社会だった。彼はこの21世紀において、大日本帝国を復元することを目論んで来た。だからこそ、あそこまで執拗改憲に固執している。アホノミクスには、21世紀版大日本帝国のために強くて大きな経済基盤をつくるという役割が託された。しかし、異を唱える人々は、安倍政治が紡ぎ出そうとする危うさと、実に果敢に闘って来た。これからも、その飽くなき不屈の闘争が、『2887』の続編の中で語られることを期待する。果敢に異を唱える人々の声が、いつもいつまでも、世を救う。

同志社大学大学院教授 浜 矩子

映画『2887』に寄せて

言葉が死に、法が死に、道理が死に、その先に死ぬのは何か。映画『2887』が描き切った無残な姿は、ゾンビとの二人羽織の続編が続く。2887+301（アベ政権の残）=3188+310（東京五輪開会までのスガ政権）計3498。福島原発被害者にとっては、奈落の底を見続けた日々だ。10年超えてふるさとに帰る道のない避難者を、あろうことか、司法の力を使って住宅から追い立てる。万余の避難者を抹消し、老朽原発を再稼働させる。膨大な放射性廃棄物と環境汚染、健康と生命の危険は将来世代に遺す。3498で打ち止めにしなければ、本当に、命が危ない。

福島原発かながわ訴訟原告団長 村田 弘

勇気を出して一歩踏み出す

この映画は、「2,887日」におよぶ安倍政権下で、「勇気を出して一歩踏み出した」ものたちによる証言記録映像だ。作品から浮かび上がるのは、安倍晋三自身のお友達や一部の既得権益者の「小さな声」を聞き、責任を取らずにやった振りのみをしていた、やっけー（沖縄口で「厄介、面倒、不快」等の意）安倍政権の姿だ。憲法、原発、拉致問題、経済、辺野古新基地。これらを考えていくときに、安倍政権と向き合うことは避けて通れないだろう。そのときこの映画が、あなたが勇気を出して踏み出す一歩を後押しする一助になれば幸いである。

「辺野古県民投票の会」代表 元山 仁士郎